

甲田の裾

KŌDA NO SUSO



2018

2号
通巻695号

松丘保養園の機関誌

社会交流会館 オープニング式典

平成 30 年 4 月 26 日



川西健登園長より挨拶



三村申吾県知事よりご祝辞をいただく



展示をご覧になる小野寺晃彦青森市長(右)



懐かしい写真を展示



図書コーナー

甲田の裾 平成30年2号 通巻695号 目次

社会交流会館開館式 式辞

..... 松丘保養園 園長 川西 健登 … 2

社会交流会館開館式 式辞

..... 入所者自治会 会長 石川 勝夫 … 5

遊歩道開通記念植樹祭

隔ての土壠から共生の遊歩道へ

..... 松丘保養園 園長 川西 健登 … 6

詩 カラ松の道 幻想 木村 全十 … 8

ごあいさつ 副園長 横山 慎 … 10

初めまして 総看護師長 種市 尚子 … 13

新任挨拶 看護師長 間山 明美 … 15

松丘保養園で野球をやった頃 村林 順造 … 16

松丘保養園の野球チーム 17

大風子油は私の命を救った 菊池 盈 … 18

療養所開設40周年記念短歌 菊池 盈 … 25

第9回 思い出食堂 看護助手 田口 陽子 … 26

第10回 思い出食堂 看護助手 田中 清香 … 30

人事異動 35

ニューフェイス紹介 36

自治会日誌 37

編集後記 38

表紙写真：松丘保養園社会交流会館

写真提供：福祉室

社会交流会館開館式 式辞

松丘保養園 園長 川 西 健 登

雨に洗われた満開の桜が春の陽ざしに映えて美しいお花見日和になりました。本日ここに、松丘保養園恒例の観桜会に先立つて、社会交流会館の開館式をとりおこなうにあたり、ご多忙の中から三村申吾・青森県知事、菊地公英・健康福祉部長、小野寺晃彦・青森市長、館山新・福祉部部長をはじめ、多くの来賓のみなさま、そして入所者のみなさまのご臨席を賜りましたこと心から感謝申し上げます。

松丘保養園の前身である北部保養院が明治四十二年に設立されてから今年の四月で満一〇九年になります。ある入所者は当時を振り返つて「ハンセン病療養所の歴史を逆のぼつて見るとき、一言では表現し得ない、誠に悲惨な暗い時代

が長く続きました。患者はすべて人権を無視され、國の方針によつて、民族浄化の美名のもとに強制隔離を唯一の施策として厳重に監視されながら、療養所に閉じ込められて、満足な医療も受けられず極貧の生活を余儀なくされ、果ては病躯をおしてまで園内作業に従事しなければ懲罰の対象として、食事すら絶たれるという過酷な苦難を背負わされて非業のうちに生涯を閉じねばならなかつたのであります。このように、誤った國の施策がいたずらに社会の差別と偏見を助長させて、幾多の悲劇が繰り返されてきてはいることも事実であります。」と書いておられます。

そのような困難の中にあつて入所者のみなさんはここで互いに助け合いながら懸命に生き、

創造的な働きをしてこられました。昭和五年に川柳などの文芸誌として創刊された「甲田の裾」、昭和十四年にハンセン病後遺症による様々な障害を持つた入所者の相互扶助のために結成された「相愛会」、そして視覚障碍の方々が昭和二十八年に結成した「盲人会」等はその一例です。実際の保養園の運営は看護・介護を含めてかなりの部分が自治会を中心とした患者である入所者の働きによつて担われていました。当時の入所者のみなさんが書かれたものを読み、遺品を手にする時、肅然とした思いに満たされます。ある入所者が「私たちも歳を取り体も弱ってきて、もう昔のようにはやれなくなつてしまつた」とおつしやられるのを伺つて、私たちは今こそ、いよいよ真剣に当時の入所のこと、松丘保養園におけるハンセン病の歴史を学び継承し、社会のみなさんに紹介していく使命があるということを改めて厳しく問われ教えられた思いがしました。

社会交流会館はハンセン病の啓発・教育のために資料の保存と展示、そして入所者を中心とした

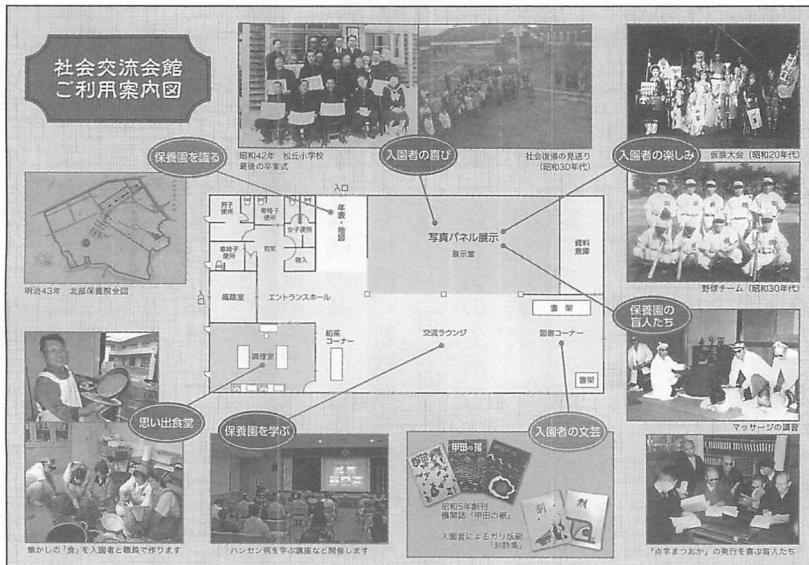
交流の促進を目的としています。啓発・教育・交流の中心は入所者のみなさまです。ですからこの社会交流会館は資料館としての機能を充実させていくと同時に、入所者のみなさまがゆつくり寛いでいただける場、そして入所者とそれ以外の人たちがここで一緒の時を過ごすことができる場にしていきたいと考えています。

社会交流会館の概略をご説明させていただきますと、まず保養園の基本的な歴史を知つていただきための年表や地図、航空写真などがあります。それから今回はまず第一回として写真パネルを中心に過去の保養園の生活の一部を紹介する展示があります。今後は順次、テーマを変えて展示を行つていく予定です。奥の図書コーナーには保養園の機関誌「甲田の裾」、盲人会の「点字松丘」、また入所者が作られた本など文学的な資料を見ていただけます。さらに、入り口の横にキッチンがあります。「思い出食堂」、それは昔懐かしい料理を入所者に教えていただきながら職員もいつしよに手作りして、園の皆で味わい、想い出を語り合

うものですが、そのために活用します。そしてこのホールでは入所者も外部から来られた方々もいつしょに桜や遙かに八甲田山を眺めながら、お茶を飲みながらくつろいでいただければと思います。そしてここに収容された三、〇七八人の患者さん、ここで亡くなられた一、六七四人の入所者一人一人が思い起こされる場になればと思います。実際にその場に身を置いて座つてみて初めて分かることがあるように思います。一定の時と場を共に在ることで自ずから伝わるものがあり、それが歴史の継承に繋がることを期待しています。

最後になりましたがこの素晴らしい社会交流会館を設計、建設していただきました創設設計と内海工業のみなさまにこころからお礼申し上げます。

今後この社会交流会館が入所者と地域社会のみなさまとの交流を促進するセンターとして活発な活動を開いていくことができるよう、みなさまのいつそうのご支援ご協力をお願ひ致します。



館内案内図（社会交流会館リーフレットより）

社会交流会館開館式 式辞

入所者自治会会长 石川勝夫

春たけなわの季節となり、桜前線が足早に北上を
続けております。

本日は、松丘保養園社会交流会館オーブン記念式
典にあたり、三村申吾青森県知事、小野寺晃彦青森
市長並びに関係各位のご出席を賜り、新装なつた会
館内において開催することができ、誠に喜ばしく光
栄であります。

入所者自治会を代表して、心から感謝とお礼を申
し上げます。

松丘保養園に待望の社会交流会館が完成し、今こ
うして皆様に披露することができるようになりまし
た。会館落成に関しましては、厚生労働省並びに関
係の皆様、近隣の皆様、及び建築工事関係の皆様あ
りがとうございました。皆様のおかげを持ちまして、
このように素晴らしい社会交流会館が建築されまし
た。

今後はこの中で、およそ九〇年にわたって続けら
れてきた強制隔離政策によりて生まれてきた人権侵
害の実態等を学ぶことにより、世の中に次から次へ
と生まれている差別問題、人権問題の解決につなが
るように努力して行かなければならぬと考えます。
この中で、展示物の資料を見たり、入所者そして
一般社会の皆様との語らいを持ちながらその想いを
深めていけたら、理想的社会交流会館の姿になるの
ではないかと思います。

どうか皆様今後とも、松丘保養園そして入所者自
治会に対し、ご支援とご協力の程をお願い申し上げ
ます。

最後に皆様のご健康と益々のご活躍を祈念申し上
げまして挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。

遊歩道開通記念植樹祭

隔ての土壠から共生の遊歩道へ

松丘保養園 園長 川 西 健 登

みなさま、松丘保養園、春の植樹祭にご参加下さりありがとうございます。

松丘保養園はハンセン病患者の隔離施設として明治四十二年に創立されてから今までの一〇九年間に三、〇〇〇人以上の患者さんが収容され、一、六〇〇人余りの患者さんが亡くなりました。ハンセン病の感染性は弱く、緩やかな隔離で十分であることは当時からわかつっていましたが、日本では行き過ぎた隔離政策が施行され、患者さんとご家族は大変なご苦労をしてこられました。

と滝田十和男さんが書いています。「昔は土壠のところへ行つて毎日泣いている人も多かつた」と語る入所者もいました。この土壠は長い年月を経て自然に低くなっていますが、平成八年にらい予防法が廃止されてからも残つていました。

数年前の五月のある日、ご高齢の入所者、根岸章さんが入所以来六〇余年にして初めてお隣の新城中学校の体育祭を見に行かれました。「子供達が一生懸命やつているところを見て感動した」と話しておられましたが、八〇歳を越えた根岸さんがシニアカーを運転して車の往来の多い狭い道路を行くのは大変危険で、付き添いの介護員に助けられてやつとの思いでたどり着いたそうです。また当時の工藤校長先生からも、中学生の通学路についているこの道路の安全性が問題になつていると伺いました。その時、高齢の入所者も中学生も地域のみなさんもいつしょに歩ける安全な道があつたらいいなといふ

思いが芽生えました。計画の段階で、この土壘を調査された国立ハンセン病資料館の黒尾先生からいただいたご意見に基づいて、土壘の一部を歴史的遺構として残すことになりました。

この「隔離の象徴としての土壘を取り除いて、共生の遊歩道を造る」という構想は多くの方々のご尽力によって二〇一六年十二月末に実現しました。実際の建設工事を担当していただいた平岡建設のみなさま、ご協力いただきました関係各位、地域のみなさまに心からの感謝とお礼を申し上げます。

本日は「共生の遊歩道」を記念して八重桜の苗木を植樹していました。奥島校長先生をはじめ新城中学校の生徒のみなさん、三浦理事長をはじめ藤保育園・園児のみなさん、さくら保育園のみなさん、近隣町内会のみなさん、三内を美しく元氣にする会の中條さん、毎年の植樹を援助してくださる日本花の会の木村さん、藤村さん、樹木医の逢坂さん、ご協力ありがとうございました。

新城中学校生徒のみなさん、長く隔離されてきた入所者にとって、ひとりで体育祭を見に行くのは決して当たり前のことではありませんでした。ひとりの入所者の勇気ある行動が契機となつて、土壘が切り開かれ新しい道が作り出されたということをよく考えてみてください。根

岸章さんは七〇年にも及ぶ隔離による離別を乗り越えて、共に生きる新しい道を示されたのではないでしょうか。この道を歩き、桜を見る度に、一緒に桜を植えた入所者の方々のことを思い、大人になつた時、どうか松丘保養園について学んだことを語り伝える人になつて下さい。藤保育園、さくら保育園のみなさんは、おじいちゃん・おばあちゃんたちとここで桜を植えたことを忘れずに、これからも花の季節には花見に来てください。今はそここの看板に書いてあることは読めないと思いますが、みんなが読めるようになる頃にはきっと八重桜も大きくなつていてるでしょう。

この共生の遊歩道と松丘の森が、松丘保養園の記憶とともに若い人々の心に刻まれ、語り伝えられ、次の世代に、未来に引き継がれていくことを心から願っています。最後にこの季節の遊歩道に因む根岸章さんの歌をご紹介します。

寮園の日々の営み見おろして丘に落葉松の
緑増しきぬ

唐松の芽吹く緑のさやかなり丘の遊歩路に
息深く吸う

カラ松の道幻想

木村全十

新しく出来た遊歩道

学校帰りの子供達の

白いスニーカーと

楽しそうな笑い声が

通り過ぎて行く

カラ松ぞいのレンガ色の道

なだらかな登りは

はるか向こうの丘につづいている

風にゆれる道端の野草の花ばなに

しばし立ちどまる

私の前を老人が一人歩いてゆく

少し前かがみだが足どりかるく
向こうの小高い丘をめざして
行くと云う

あれはもう一人の私の影法師だ
カラ松の樹間を風が通りぬけ

また子供達のはずんだ声が下がつて行くと
影法師ははるかな丘に遠ざかる

カラ松の道を

六月の風が

通り抜ける時

小さな草花が微笑みの手を

ふるとき

私の想いもはこばれて行くのです



ごあいさつ

副園長 横山 慎



四月一日付けで着任しました副園長の 横山 慎（よこやま まこと）と申します。今回ご縁があつて松丘保養園で勤務することになりました。宜しくお願ひ申し上げます。

まずは簡単ですが自己紹介をさせていただきます。

出身は青森県青森市、昭和三十一年生まれ、男性です。

中学校までは青森市で過ごしておりましたが、諸般の事情により高校は東京の都立高校に進学しました。当時、自分が描いた人生設計によりますと高校卒業後は青森県に帰つて来る予定ではなかつたのですが、弘前大学医学部に入学することになり青森県に帰ることになりました。

弘前大学医学部卒業後は弘前大学医学部第二外科教室（現在の消化器外科教室）に入局し、ご指導を賜りました。その後三十数年の間、秋田県や青森県内の病院で勤務医として外科医をしておりました。

外科医としての守備範囲は主に胃、小腸、大腸、肝臓、胆嚢、脾臓等の消化器一般および甲状腺、乳腺等の疾患に対する外科的治療でした。しかし、最近は視力、体力

などの衰えから大きな手術からは遠ざかつております。体力は氣力である程度カバーできますが老眼には勝てません。遠近両用眼鏡があるだらうとのご指摘もありますがなかなか丁度良くならないものです。

松丘保養園にも立派な手術室がありますが、そこで私が手術をする機会はおそらくないでしよう。松丘保養園では、これまでも手術室を利用する機会は多くなかつたようです。外科手術はチーム医療の最たるものでこれから新たにチームを構築することはマンパワー的にも医療経済的にも難しいと思われます。手術機器の進歩はめざましく新たに億単位の投資が必要となるでしよう。また、日常的に手術をしていないと医師もスタッフも一定のスキルを維持することは容易ではありません。

近年、松丘保養園の入所者の皆様も高齢化し平均年齢も八十六歳を超えているということです。高齢化に伴い癌などの悪性腫瘍を患つてゐる患者さんも多くなつてゐるといふております。今後治療のために手術が必要となるような患者さんも多くなると思われますが、年齢的な問題や心疾患、呼吸器疾患などの併発症により手術を選択できない患者さんもいらっしゃると思われます。これまでの外科医としての経験を活かしてそのような患者さんの治療やケアに於いて少しでもお役に立てればと思つております。

ハンセン病については学生の頃、細菌学の講義で少し知識を得ましたが、多くのことについて知る機会はこれまでありませんでした。現在は治療法も確立しており、近年、日本では新たに発症される方もほとんどいらっしゃらない疾患という認識でした。医学部卒業後も、医療に携わるものとしてはハンセン病の患者さんと関わる機会は

一度もありませんでした。松丘保養園については青森市民でありながらその存在を知ったのは第二外科教室に入局してからのことでした。第二外科教室の関連施設のなかのひとつとして教室から継続的に医師が派遣されていたからです。当時、「私も派遣される機会があるかも知れないな」と漠然と思っていた記憶があります。

現在、松丘保養園で療養生活を送られている皆様は感染症としてのハンセン病は既に治癒されています。しかし、その後遺症や合併症のために不自由な生活を強いられている方も多いいらつしやると思われます。また百年以上にわたる松丘保養園の長い歴史は「差別と偏見」の歴史でもあつたと伺っております。平成八年に「らい予防法」が廃止されてから久しいですが入所者の皆様の歴史は逆戻りできるものではありません。入所者の皆様のご苦労は察するに余りあるものと思われます。

この度、松丘保養園 川西健登園長、弘前大学消化器外科 褐田健一教授のご高配により松丘保養園で勤務する機会をいただきました。

これまで医療者としての勤務経験は全て急性期の患者さんの診療に携わる施設でした。療養型の病院や施設での勤務経験は全くありません。ハンセン病療養所での勤務についても松丘保養園が初めての経験となります。

不慣れなことも多々あろうかと思いますが、入所されている方々が安全かつ安心して療養生活が送れますように、これまでの経験を活かしながら、お一人お一人に寄り添つた医療の提供ができますよう努力して参りたいと思います。

宜しくお願い申し上げます。

はじめまして

初めまして

総看護師長 種市尚子



四月一日付け人事異動で、独立行政法人国立病院機構弘前病院副看護部長より、国立療養所松丘保養園総看護師長に昇任となりました種市尚子と申します。入所者の皆様、初めましてどうぞよろしくお願ひ致します。

私は、国立弘前病院附属看護学校を卒業後、国立弘前病院に入職し、複数の診療科での看護師経験を経て、青森病院、弘前病院、仙台医療センター、弘前病院と勤務し今年度松丘保養園に着任いたしました。三十年以上国立病院に勤務しておりますが、ハンセン病療養所は初めての勤務となります。今ここに、ハンセン病に関する歴史に少しずつ触れている中で、強制隔離、差別、偏見等、想像をはるかに超えた入所者の方々の辛さや悲しみを想い、責任の重さに身が引きしまる思いです。

三十年余りの看護師生活の中で、立場の違いはありますが、施設を異動する毎に、考えことがあります。それは看護・介護の基本は変わらない、入所の方々の安全を守り、そのことは入所者さんにとって本当に安心できていることなのかと常に考えながらケアするということです。そして今入所の方々が高齢となり、不自由度が増す中、医療及び介護の重要性を痛感し、入所の方々の安全を守り、安心してその人

らしい生活を送つていただきたいように看護課が一丸となつて進んでいけるように努め
ていきたいと思います。

また、今年度はハンセン病の資料の保存・展示と入所者を中心とした交流の促進
を目的とした社会交流会館がオープンし、土壠を削平して作られた共生の遊歩道に
沿つて桜の植樹が行われ、来年度は創立百十周年を迎えます。「私たちは、入所者一
人ひとりが歩んだ道のりと生命の尊さを深く認識し、地域の人々と共に歩む、豊かで
心安らかな療養環境の提供に努めます」という松丘保養園理念のもと、入所者お一人
おひとりと向きあい寄り添い、歩んだ道のりを理解し認識できるよう努めてまいり
ます。まだまだ未熟もので、ご迷惑をおかけすると存じますが、皆様どうぞよろしく
お願い致します。

はじめまして



新任挨拶

中央センター2階看護師長 間山明美

この度、平成三十年四月一日付けをもちまして、独立行政法人国立病院機構弘前病院より看護師長に承認になりました間山明美と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

弘前病院で助産師として十年間勤務し、出産後は、整形外科、小児科、婦人科、消化器などの混合病棟で患者さんに接してきました。助産師として約六〇〇件の出産に関わらせて頂きました。生命の誕生そのものに感動し、やりがいを感じた二十代でした。出産後は小児科勤務になり、出産に関わった子供達と関わる中で、障害を持つて懸命に生き、十二歳での最後をご家族と共にみとった時や、早産後の脳性麻痺のご家族の思いに寄り添つていく事に懸命だった三十代でした。四十代になり子供が中学生になつた今年、松丘保養園に移動になりました。これからは、松丘保養園の歴史を理解し、入居者の皆様一人一人が歩んだ道のりと生命の尊さを深く認識し、安心して過ごす事が出来るよう寄り添つて一生懸命努めてまいりたいと思います。よろしくお願い致します。

松丘保養園で

野球をやつた頃

青森市 村林順造

今は少子高齢化の影響で人手不足が深刻化し、企業は働き手を確保するのに苦労しているようですが、私が高校を卒業した1951（昭和26）年ごろは大変な就職難でした。戦後の学制改革で6・3・3制に変わり、私は工業高校の電気科で6年学びました。しかし、学んだ学科を生かして就職できた人は3分の1程度で、多くの同級生は就職先を探すのに四苦八苦していた時代でした。隔世の感があります。

また、その頃から野球がブームとなり、青森市内の職場でも

させていました。

チームを作つて選手を探し採用

ところがある日の試合。一塁

受けて就職でき、心配していました。私もその恩恵を母を安心させた思い出がありま

す。一緒に野球をやつた級友は青森市の国立ハンセン病療養所「松丘保養園」に勤めることになりましたが、ハンセン病には

なりましたが、ハンセン病には

大変な偏見があつた時代。級友

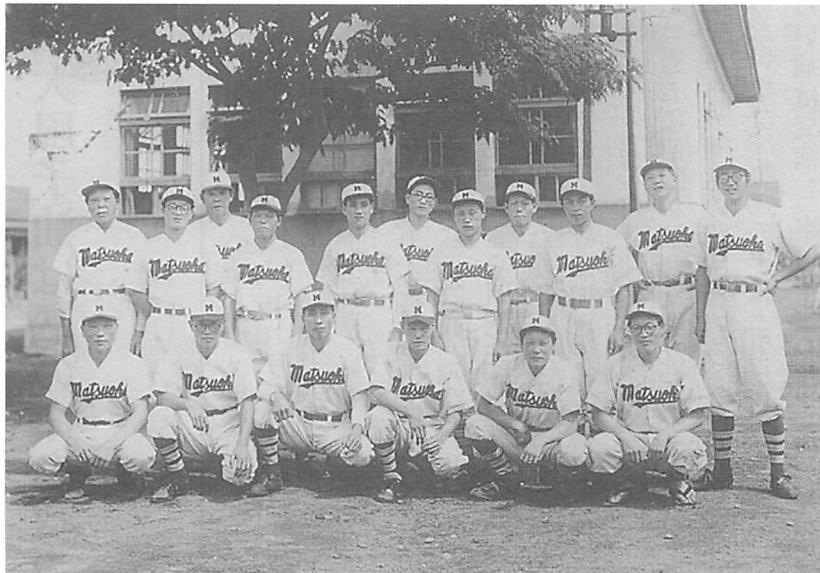
は勤務先を聞かれると「新城の方の会社」と言葉を濁しました。

元入所者の方々に幸あらんことを祈念いたします。

保養園の園長は野球が好きな方で、入所者の慰安も兼ねてチームの結成を計画し、近くに設けた野球用グラウンドに市内の職場チームを招いて入所者に観戦

（H30・5・15 東奥日報夕刊
明鏡欄より転載）

東奥日報紙「社会交流会館オープン」の記事をご覧になつた村林順造さんが同紙明鏡欄にご投稿されました文をこの本人と東奥日報社の承諾を得て掲載させていただきました。



昭和 27 年頃の野球チーム

松丘保養園の野球チーム

松丘保養園の野球は昭和 24 年頃から始まりました。

昭和 25 年青森県救癒協会より野球用具一式を寄贈され、その熱は一層高まりました。昭和 25 年 7 月職員対入園者野球試合、昭和 26 年 8 月には東北新生園チームが来園し対抗試合を行い、新生園との親善交流試合は 4 年以上続き、多磨全生園や駿河療養所との遠征試合もありました。

五代目園長・阿部秀直園長は、野球を通して「ハンセン氏病の理解運動」を行い、当時の青森県内強豪野球チームの中では「阿部野球」「松丘野球」と言われ、野球の心技体について総称されました。

地域のチーム（青森銀行・青和銀行・国立病院）とも戦い、職員チームに入園者 2 名加わり県庁チームと試合したこと也有ったそうです。

（松丘保養園社会交流会館 展示パネルより）

大風子油は私の命を救つた

菊
きく
池
ち
盈
えい

二月五日は私には入院（園）記念日もある。日本軍が支事変（たけなわ）で、日本軍は、十二月に南京を陥落させ、

文字通り向かうところ敵無しといった、連勝に沸き返っていた十三年の年であつた。

あれから今年で丸五十三年を迎える。今日流で言えば十三歳、それが六十六歳となる。昔で言えば仮の宿で、これまで生きられた患者は数少ない。如何に医療技術が進歩したかという事が、私には判然と知る事が出来る。それに加えて食事情が抜群に改善された事も、否めない事実であろう。

私は過去に何回か触れた様な記憶もあるが、入院したその日、同室の岡田という、何処が病気なのか判らない様な、軽症で年輩と思われる方より、「らい病は発病してから十五年生きられればよいな」と言われた。子供の事であり、私はこの方の言

う事が本当なのだろうとも思い、それを本気にもしていた。

それがどうだろう、あれから五十三年という長い年月を本病その他様々病の襲撃を受けはしたが、無事に昭和から平成へと息をついている。

入院したばかりの子供の私に「十五年しか生きられない」と眞面目な顔をして語った岡田さんがいたら、何と思うことだろうか。

その岡田という男も、私が入院した年、夏頃だつたか軽快退院だつたか、或いは一時帰着で故郷の秋田県へ帰つたきり二度と戻つては来なかつたし、この男の消息については誰も知る者もいなか、語る人も居ない。

故郷の叔母より、初めて届いた私の手紙の封筒の表に、どんな気持ちで書いたものか、子供だと小馬

鹿にしたものか、又は悪気の無いいたずらで書いたものか、筆ですらすらといくつもの文字を認めたものであり、私は今もその封書を、不愉快に思つてゐるが、入院して初めての便りとして、大事に保存している。

院より支給の、棒縞の袷を着て帯の間に両手を並べる様に、甲を前にして差し込んで毎日を過ごしている姿が、瞼の裏に焼きついている。

今は無い梅花寮の二号室が、俗に言う草鞋を脱いだ室だが、当時三間に五間という三十畳敷の部屋に押し入れ半間を与えられ、十二名定員一杯に起居を共にさせられたが、今に憶え巴よくぞ過ごせた、と慄然とする思いである。

尤もこの比率は、全国共通の様で、何故こうなのが女性より男性の方が統計的にも、罹患する率が多い。この状態は万国同じではないだろうか。

その現象が、昨年より遂にここでは逆転したのである。

この事は全国十三ヶ所の療養所の中でも初めての事であり、私は全患協のニュース記事にもした。それ程に男性患者の死亡率が多く、近年益々顕著である。前述の私が入院した時の梅花寮員四十八名中、

一室だけであつた十二名の女性患者は、三分の一が健在男性患者三十六名中、僅かに私を含めて二名しか残つていないと、いう状態から推しても、容易に男性の先急ぎが多いことが頷けると思う。過去二十五年間の入所者死亡率を見ても、男性一八七名に対し女性は七十八名、実に男性の死亡率は死亡者の

生を重んじて過ごしているものか、四名が今尚元氣で生活を楽しんでいる。

当時の入所者は五百名前後、その比率も、男性患者三に対し女性患者は二弱で、男性が圧倒的に多くつた。

七十五%を占める高率である。こうした現状はここだけのものだろうか。四分の一世纪で二六五名の療友が、病魔に勝てず、或いは人は天寿というが高齢の為にここから消えている。

こうした男性の死亡増に依つて、ここ松丘に於ける男女の差が、開所八十一年目にして逆転現象となつたものである。

全入所者に、入所番号制が導入されたのは、元園長の荒川巖先生が医務課長となられた、三十七年以降と記憶する。私は十三年二月の入院（園）で番号が二一三番、という事は三十年前私より以前に入院した患者は二一二名現存していた事になる。それが今日現在、僅かに七十四名、その中で女性四十九名男性は半分の二十五名しか現存していない。実に一三八名が消えた事になり、酷な古き時代を生き抜いた者は云々、寄る年波には抗すべくもない、といふ事でもある。がこの数字から推しても、女性の生命が如何に男性に生命を上回っているかという事が歴然としている事実である。将に女性万歳といふところでもあろうか。

因みにここでの最高齢者は九十六歳、無論女性で

あり、耳は遠いが目も見え記憶も確りしている。宮城県出身のY婆さんである。当然乍ら百歳は疑いないだろうし、私共もそれを期待している。

現在入所人員は三八三名、中女性一九三、男性一九〇と女性が三名上回っている。昭和十六、七年の強制収容時の、八百名を越える、入所患者の居つた頃を思うと、何か夢の様である。これはここばかりの現象ではなく、いつも一千名を割る事のなかつた、文字通り私共は世界一のハンセンの療養所だろう、と思つていた熊本の恵楓園でさえ、昨年秋頃遂に千名を割つた、という話を聞いた。もう国内で千名を越える患者の居る療養所は存在しない。

一年に二百名近い患者が減つてゆく中で、当然の事ではあるが、何よりも新発患者を見ない事が喜ばしい事だと言わなければなるまい。

平均年齢を六十八歳強と、益々高齢者集団であり、こんな集団になろうなどと、戦前の入所者で想像した者があつただろうか。私は仕事がら、三好圭純坊さんが健在中丹念に認め残して呉れた『過去帖』を時折開いて、昔の人々を懐かしむのだが、その意外に驚くのである。七十年代の爺さん婆さんと思つて

いた方が、殆ど五十代であり、五十代六十代の方と思つていた方が、実は三十代の半ばであり、或いは二十代であつたなど、到底信じられない様な老けた状態で亡くなつてゐた事に氣付いたからである。

それに以前の患者は老けが目立つたのか、見る目が狂つていたのか、みんな年齢より老けていた様でもある。原因はなんと言つても食生活に問題があつた様にも思われる。又苦勞も多かつたかも知れない。食生活が良くなつてから長生き出来る様になつた事は、厳然たる事実であり、食文化が体质をも変え人間を若くしているという根拠を、何かで読んだこともある。

勿論医学の進展に依つて、現在の高齢化社会が産まれた事を否定する者はあるまいが、殊ハンセン病に限つて素人なりに、体験上言わして貰えば、必ず

しも化学療法のみに依つて、菌が陰性になつたとは言い難い様に思える。プロミン以後の科学者は、それまで使用された大風子油という、純植物性の治療薬を、非現代的と云つて無視し過去に追いやつて仕舞つたが、入所歴が今五十年六十年と長い療養所生活を送つてゐる、古い入所者は、その大半は大風子

油の効果に依つて現在があると思つてゐるのではないか。特に乾性と言われる神經癲に侵された者にとつては…。

今頃こんな前時代的な、と思われる事を持ち出して、頭が可笑しいのでは、と笑う者も居るだろうが、私には真剣な問題だとも思つてゐる。私自身大風子油に依つて助けられ、今日があると思つてゐるからである。両手両足に、自分乍ら驚く程の大きな潰瘍を持つて入院した私は、週三回五〇〇ずつの大風子油注射を打つた事に依つて、骨まで侵されそうに食い入つた潰瘍が、春桜の咲く頃は丸で嘘の様に乾き、以後今日まで、不注意に依る火傷等それ以外、入院した時のある悲惨な状態に戻つた事はない。このことは如何に大風子油が抜群に効いたか、という証明でもある。

然しだ風子油にも欠点がない訳ではない。湿性癲にはあまり効果がなかつた、という説もある。その為に咽喉を侵された患者は、切開をしてカニュレイを喉に入れ、喉で呼吸をしなければならなかつた。そうした患者が、昔は大勢居り看護婦の少なかつた当時の病棟看護は、このカニュレイの交換が、少年

の頃の私には嫌な一つの仕事でもあつた。

この咽喉切開を無くしたのはプロミンであり、湿性患者にとってプロミンは、夢の様な福音でもあつた。大風子油は乾性に効き、プロミンは湿性に素晴らしい効果をもたらした事は事実としても、大風子油に限つては、薬の性質を知つて上手に薬を利用した者が、戦後を生き残れたのでは、と思つてゐる。

効くからと言つて、年中打ち続けた者は耐性が出来、何の効果を示さず病を重くして行つた事である。注射係の大久卷之助という、男性で看護婦（夫）の資格を持つ職員が、馬鹿にした様に、「ハイ枯木に水、ハイ枯木に水」と口にしながら、二十cc入る注射器で、次々に太い針を刺して注射をしていた光景が、目に見える様だ。

大風子油は医局で打つて貰う以外、奥州堺市の岡村平兵衛商店より、当時三円五〇銭で、どれ程購入して密かに打つたか計り知れないだろう。がそれも通して打つた者はあまり効果はなかつたのでは、と思つてゐる。この薬の効果は、半年は必ず休む事にあり、あくまでも、耐性を造らない事であつたろう。十七年真冬に、足袋も履かずに、藁草履一つで病

棟の看護をした私は、冷えた事が体に影響したのか、三ヶ月位で神経痛を煩い床に伏した事がある。のどや手の神経が麻痺し、食べた物を飲み込む力が失せ、すべて鼻から出てしまう程の重症に見舞われ、おまけに手に力なく、丼さえ持てない状態であつた。この時右足がさがる。

診察を中條園長に乞い、懃々寮まで来て頂いた。私の病状を診た中條園長は、看護婦に向かつて、「大風子油を一日おきにやれ。」と指示し悠然と立ち去つた。

その頃私はもう注射はしていなかつた。園長の診察でもつと氣のきいた治療法があるものと期待をしたのだが、「大風子油をやれ」というだけで、何の処置もして貰えなかつた事に、内心がつかりしたのだが、隔日に五ccずつ打つた大風子油は、入院時の効果の様に、日を追う毎に神経痛が始まり、六月には床を離れることが出来た。

らしい性の神経痛は、本病が活発になる事で、激痛をもよおすもの、という本病の治療を何よりも優先して方法をとつたものである。勿論大風子油に依つてライ即ちハンセン病が完治する訳ではないが、菌

の活動を停止させる薬効は、プロミンに数倍劣るかも知れないが、病状に合わせ適切な管理の基に用いられるならば、この位効果を現す物質はないかも知れない。

私はこの時の、中條園長の処置を、自ら得た体験として、その後二十八年に全身が痛んだ時、とうに退職したS看護士に、まだ医局に残されていた大風子油を、密かに打つて頂き、自ら治した体験を持っている。この時以来、私は本病に依る神経痛を経験していない。セファランチンで右手拇指を麻痺させ、プロミンで危うく両眼を失明させるところであつた。私の体は化学療法に向いていなかつたのかも知れない。もしこの二十八年に、大風子油が医局に無かつたら、当然私はこの世に存在していなかつただろうと思つてゐる。

人間誰しも六十の坂を越えれば、ガタが来るといふか体力も衰え、様々な余病に襲われがちである。これを称して成人病と言つてゐるが、ハンセン病にも凡ゆる戦い（療法だが）をぐぐり抜けた抜群に成長した強かな病原菌がいても不思議ではあるまい。

最近特に問題となつてゐる「難治らい」はその典型

的な現れではないだらうか。アメリカでさえそうした患者がいると聞く。

今から三十年位前に、松丘の園長も勤めた故桜井方策先生は、当時まだ発行していた、日本救らい協会の新聞というか「楓の蔭」という会報に、

「最近患者間で、治つた治つた、などと言つてい る者もいるがとんでもないことだ。一時菌が抑えられてゐるだけの事で治つたなどとは途方もない。」 う意味の一文を寄せ、暗に有頂天となつて喜んでい る患者に一石を投じ、注意を喚起していくことを思 い出すが、この桜井先生の論文に一言の反論もな かつた事を、私は記憶しているが記憶違いだらうか。 がこの警告めいた桜井先生の論が、極く一部にでは あるが現実のものとなつてゐる事も否定出来ない。 化学の力で抑える事の出来た堤防も、老化によつて 次々に亀裂が生じ、そこから滲み出る水漏れは、同 じ化学の力では容易に修復し難い状態になつてゐる のでは、と言つた細かな疑問を抱くからである。そ れが「難治らい」などと言つた新しい形体で私共の 前に現れた事は残念という外ない。

私自身、何十年来本病の治療はしなかつた。菌が

陰性という事もあって治療の必要性を認めなかつたからである。だが自ら望んで一昨年より半年ずつに区切つて本病の治療をしている。六十三年秋長島での国碁大会の最中に、顔面、そして四肢の神経系統に、何とも言えない異状を感じ始めたからである。以後両腕の神経筋が肥大し、不快なしびれを常時感じる様になり、その症状は五十年前と同じである。唯痛みがないのが違うだけである。之に痛みがついた以前の症状だつたら、到底この原稿も書けない。然し治療の効果について、体はまだ答えを出して呉れない。

あの時は私に効く大風子油があつた。それから十年後も大風子油があつた。だが今は無い。現代医療をあまりに信頼しきつたが為に、大風子油は、前時代的ない異物として近代科学者に依つて無視されたからである。

「大風子」イギリ科の高木、インドシナ、ビルマが原産（中略）種子から大風子油をとる。一油、大風子の種子を搾つた脂肪油（中略）古来ハンセン病に特効があるとして使われてきたが近時プロミンにとって代わられた、と「広辞苑」にある。

平均年齢が七十になんなんとする吾が国のハンセン病患者に、今更亡靈（私には神だつたが）となつた大風子油の出番はないと思うが、私は、「難治らい」などと言われ苦吟している、何名かの方々に、若しかしたら効くのでは、と思うが故に亡靈のお出ましもあつては、と唯思うだけである。十五年しか生きられないと言われた命が、今日まで生きてこられたのは大風子油のお陰と思っているからである。

（甲田の裾 平成三年一号掲載）

※編集局より

（菊池盈）昨年十二月九十二歳で亡くなつた菊池盈（本名菊地正實）氏は十三歳で故郷・福島県から追われるように入所。「十五年生きられればよいな」と言われた命であつたが、九十二歳、療養所生活七十九年で生涯を終えた。

（松丘保養園）に入所するまでは、筆舌に尽くし難い経験をしたが、克明に記憶・記録されており、昭和初期のハンセン病に対する差別が如何に壯絶なものであつたか、私達に教えてくれる。次頁には、入所当時の心情を綴つた歌を紹介。十三歳の少年が背負うにはあまりに過酷な運命であつた。

療養所開設四十周年記念短歌

菊 池 盈

煙り噴く那須山麓よたそがれに佇つ別れ路は思い出の

今更に恨み言などおもはねど虐げし人等幸福なるか

父母逝きて癩病む我の行くべきは死より外なしと兄姉

が説く

死すべきは易からなくと義姉の言ふ乞事を俯向き聞く

も

無慈悲なる言語諾いつ我が胸に自棄の血潮が逆捲く覚

ゆ

死は怖しされど物乞いも尚更に諾い難し幼き我は

冷酷なる仕打ちに堪えて死に切れぬ宿命に泣きぬ続く

幾日は

生くべきの道なくされど死ぬべきの決心もつかず去就

に迷ふ

しよぼしよぼと小暗き朝の家を出ぬ胸に虚構の死が彷

徨いて

金などのあらう筈なく着のみにて那須路さまよい目標

あらぬなり

うらぶれの魂いだきつつ病める身は那須麓路のわくら

葉を踏む

たそがるる麓の路の枯芝に思いあぐしみ躰を投げにけ

り

一途なる希い求めて寒風に愛を夢見つ十三の我は

水車ゆたりと廻るその次の灯に囲まるる懐かしの家

祖母が泣き叔父叔母一同哭きたりき母の新盆に訪ねし

時は

うつそみは罪人なるや懐かしき家の灯光が恐く眸を射

る

一步二歩静かに触るる戸の縁が恐怖に怯ゆる手に戦け

る

既にすでに我的來べきは予知せしと噂語らう叔父のひ

とみ寂し

かたいなる我を嫌へるうかららはむすびつくりてタゲ

すすむる

吾の寝る布団あるやと問うてゐる伯母の声だに胸えが
るがに

(昭和二十四年一～五号合併号掲載)

第九回 思い出食堂

昔と今を繋ぐ思い出食堂

看護助手 田口陽子

第九回目の思い出食堂が十二月六日（水）に開催されました。今回、私は四回目の参加です。毎回、色々な料理を作り、料理を食べてくださった入所者さんがどんな反応を示すのかとても楽しみに感じています。

今回のメニューは入所者さんがよく作つていった秋刀魚のつみれ汁と豆ごはんです。これまでと同様に前日の午後から、文化センターでの下準備をしました。今回は、田沢忠さん、入所者Aさん、木村あさよさんの三名の入所者さんがお手伝いに参加して下さり、スタッフ四名と合わせて七名での作業となりました。

始めに、野菜を切る作業と秋刀魚を叩く作業を分担して行う事にしました。私はゴボウをささがきにしたり、野菜を切る作業を手伝いました。隣では、Aさんが、沢山のじやがいもを包丁で上手に皮むきし、手際良く切つっていました。一方では、田沢さんが先頭になりスタッフ一名と五〇本の冷凍秋刀魚を手際良く包丁で細かく叩いてくれました。秋刀魚を叩くトントントンという音が、会話が聞き取れないほど部屋中に響いていました。みなさんが見てみると、真剣な表情で作業を行つて



トントンとリズムよく秋刀魚をたたく

いました。作業が進むにつれ、会話も弾み、笑い声が聞こえる様になり楽しく作業を行なう事ができました。

次に細かく叩いた秋刀魚を、木村あさよさんと一緒にすり鉢ですりました。木村さんは「すりこぎ棒、もうちよつと大つきいばいいんだよな。」と、言いながらも、慣れた手付きですり始め「代わりますよ」と、声を掛けるのですが、「大丈夫だ！昔はよくやつたんだ、秋刀魚のつみれ汁もよく作つたんだ」と、話しながら昔を思い出したのか、なかなか手を休めようとしませんでした。以前は料理をよくしていたそうですが、最近は料理をすることもほとんどなく、今回の思い出食堂を通じ料理魂に火が付いたようです。私も秋刀魚をすつてみたのですが、思つた以上に生地が重く、すりこぎ棒を動かすのがやつとでした。

秋刀魚のある程度すつたら、卵と味噌を加え、再びります。「卵が入ると、ふんわりして美味しいくなるんだよ」と、Aさんが教えてくれました。

今回は、六〇食分を作るので、大きな鍋を用意



すりこぎを持つ手は慣れたもの

声で、急遽、秋刀魚の皮をだしパックに詰め、鍋へ投入。出汁をとることにしました。野菜に火が通つたら、つみれの投入です。まずは、Aさんが手本を見せてくれました。へらにつみれを乗せ、大きめのスプーンでよく、鍋へ入れます。少し緊張しながらスタッフ皆でやつてみました。鍋一面につみれが浮かび火が通るように、時々汁の中に沈めてあげました。えのき、ねぎも加え、最後に味噌で味を調えて完成となりました。

しました。鍋にお湯を沸かし、ごぼう、にんじん、じゃがいもを茹でます。野菜を茹でている間に、使わなかつた秋刀魚の皮の部分を捨てようとして、スタッフからの「捨てるのもつたいない。皮を出汁に使えばいいんじゃない。」との一

声で、秋刀魚の皮をだしパックに詰め、鍋へ投入。出汁をとることにしました。野菜に火が通つたら、つみれの投入です。まずは、Aさんが手本を見せてくれました。へらにつみれを乗せ、大きめのスプーンでよく、鍋へ入れます。少し

緊張しながらスタッフ皆でやつてみました。鍋一面につみれが浮かび火が通るように、時々汁の中に沈めてあげました。えのき、ねぎも加え、最後に味噌で味を調えて完成となりました。

早速、皆で味見をしてみました。つみれには臭みがなく、野菜と秋刀魚の両方からとても良い出汁が出てしつかりと味が付いていました。

汁の味を濃くしなかつたことにより、つみれの味が引き立つていました。思わず

「うわあ」と声が出るほどの出来映えで、こんなに美味しい料理を作れたなんて、すごい！と、思うほどでした。

前日の作業は、豆ごはんに使う餅米を研いで、炊飯器にセットすれば終了です。餅米十四合を研ぎ、二台の炊飯器に七合ずつに分けてセットしました。この時の水加減は、入所者に教わったように、米の量より一合分少なくし炊飯器にセットしました。翌朝に焼きあがるようにタイマーをセットし完了

です。今回、豆ご飯の作り方を教えて頂いた入所さんは、餅米を研いで、数時間水に浸けておいた後に炊いているという事でした。時間の都合上、研いだ餅米を一晩水に浸けておかなければならず、一晩でどの程度、水を吸っているのか、水加減は大丈夫なのか、とても不安でした。私も他のスタッフも、餅米を炊飯器で炊くという経験はほとんどなく、当日になつてみないと、出来がわからないという不安もありましたが、当日の朝、炊飯器の蓋を開けてみると、上手く焼きあがっていたので、ホッとしました。後は、塩豆ごはんをおにぎりにすれば完成です。

当日の朝は、Aさんも手伝いに来てくれ、一緒に、焼きあがったご飯に塩豆を混ぜ、おにぎりをにぎりました。これで全ての料理が無事に完成し、ほつとしたのもつかの間、時計を見ると、丁度、開店時刻となっていました。

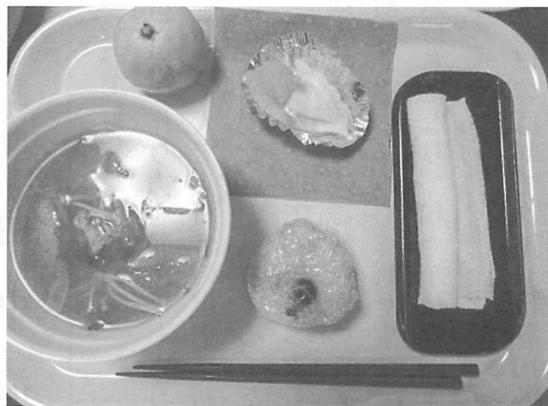
開店してすぐに、数名の入所者さんが来てくれました。食べた後の感想を聞くと、「美味しかったよ。昔は、給食から生の秋刀魚を現配で貰って、



つみれ投入

よく作つたもんだよ」とか、「秋刀魚の他にほつけやいわしでも作つたよ」と、思い出話しを聞かせてくれました。気付けば、会場も入所者さんや、付き添いのスタッフで賑わっていました。私達も料理を提供するのに忙しくなり、入所者さんとゆつくり話す事が出来なかつたくらいです。

この「思い出食堂」は、ただ単に、料理を提供するのではなく、参加して下さった入所者さんが料理を通してスタッフに思い出話しを聞かせてくれたり、入所者同士がお互いに昔を懐かしむ場となつていてるんだなあと、感じました。私も、一緒に料理を作る過程で、入所者さんから色々な事を学び、沢山の思い出のエピソードを聞くことが出来ました。入所者さんの思い出、そして、新しい私の思い出ができ、名前の様に、本当の思い出食堂になりました。



出来上がり！いただきます!!

第十回 思い出食堂

入所者と一緒に楽しんで来た「思い出食堂」

看護助手 田 中 清 香

私が「思い出食堂」に携わってから、あつと言

う間の一年でした。

最初は、戸惑つてばかりで、何をしたら良いのか、入所者の方に何を話して良いのかウロウロ、オロオロするばかりの手探り状態でした。回数を重ねる度、みんなでいろいろな意見も出せるようになり、試行錯誤し、それぞれの得意分野で自然に役割を果たしていく、プロジェクトチームとしての絆がどんどん強くなつていくのが実感出来たと共に、自分達の楽しみや喜びにもなつて行きました。

今年度最後のメニューはきりたんぽ汁と煮リンゴです。きりたんぽと言えば秋田名物、リンゴと言えば青森名物、お品書きにもこの二大名物を楽しんで下さいと書いたように、調理する側の私も

とても楽しみでした。

きりたんぽの作り方を教えてもらうため、工藤まゆみさんと二人で入所者の自宅を訪ねました。

私は、初めて対面し、お話をする方だったのでドキドキ、ワクワク、とても緊張しましたが快く自宅に招き入れてくれ、ご飯も炊いて必要な道具一式を準備して待つていてくれた事に、ありがたく丁寧に教えてもらう事が出来ました。

きりたんぽの原料である米は秋田名物「あきたこまち」を使用。

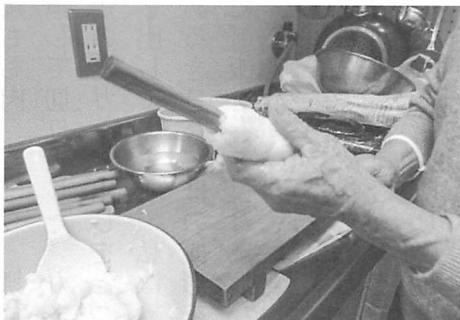
普段と同じようにご飯を焼き、約三合できりたんぽが八本出来るのだそうですが、そのご飯を少しつぶつぶが残る程度に半殺しにするとみるみる

うちに粘りが出て来ます。そのご飯をくしに巻き付けて行くのですが、くしは手作りの物で想像していたより太くて長くとても軽い物でした。

串の木材は、何でも良いわけではなく、ご飯がくついてしまうため、軟らか

く水を良く吸う杉の木が適しているという事を教えてもらい、長年きりたんぽを作つてきた入所者の知恵と知識に感心しました。

串におぎり大のご飯を巻き付け、手で握りながら長く伸ばして行き、最後の仕上げにまな板の上で転がして作るのですが、ただ眺めている私は簡単そうに見えました。しかし、いざ見よう見真似でやってみると、と



これが職人の手付きです

そんな私に「手のひらでまな板の上いつぱい大きく転がすんだ。」と優しく実演しながら教えてくれ、その通りにやつてみると何とかそれらしい形に近づき、入所者の職人並の手付きに改めて驚きました。これを六十本以上作れるのか、今の練習の手順が当日まで記憶に残っているのか感覚を忘れてしまわないかと「不安だね。」と工藤まゆみさんと話していました。

「昔は、どこの家にも囲炉裏があつたから、囲炉裏に立てて良く焼いて食べたんだよ」と話してくれ、思わず私が「味噌をつけると美味しいですね。」と言うと、さつと冷蔵庫から味噌と酒を出し混ぜて、焼きたてのきりたんぽに塗つてご馳走してくれました。それは、それは感動的なおいしさで、市販の物とは全く別物で今までに食べた事のないような食感でした。更に手作りの漬け物も出して来てくれ、最初の緊張が嘘のような雰囲気

の中、指導とおもてなしを受けました。作り終えて台所から居室に移動しテーブルを囲んで昔の写真を見ながら、思い出話をしてくれ、私にとつて心温まる時間を共に過ごし、これも思い出食堂に携わっているからこそその楽しみです。

手厚い指導を受けてから、半月後、思い出食堂の前日です。

串と電気コンロのセットは、入所者が快く貸してくれました。文化センターで、二十四合の米を二台の炊飯器で炊き、鶏もも肉、ごぼう、舞茸、葱、糸コンの材料を分担して切りました。ガス台の上の鍋からは比内地鶏の鶏ガラで出しをとったスープが良い匂いを醸し出しています。私は練習の成果、腕の見せ所であるきりたんぽの成形を担当し、意氣揚々とくしにご飯を巻き付けましたが、

くしに水を吸わせすぎてご飯がくしからはがれてしまふというハプニングで慌ててしまいました。時間がたつうちにくしの水分も抜け段々巻きつきが良くなつて来たと同時に、感覚を取り戻し練習の成果が出てきました。成形したきりたんぽを電

気コンロに4本程乗せ、焼け具合を見ながら、しを回してじっくり弱火でまんべんなく焼けていくご飯のチリチリという音と香ばしい匂いは最高です。更に具材と共に煮ただし汁と相まって、室内はとても美味しそうな匂いで充満していました。六〇本のきりたんぽを作っている間、当食堂のマスターは煮リンゴと掛け持ちで、行ったり来たり大忙しです。そのマスター特製の煮リンゴに、職員からの情報で甘みと酸味が丁度良く出るCCLモンジユースを仕上げに使用しました。

今回の思い出食堂は二月ということで、バレンタインデーをイメージした大きなハート型の風船を横濱明美さんが準備し、野呂文枝さんは花の飾りを持って来てくれ、雰囲気作りのためににみんなで話し合い会場を飾りました。

当日はインフルエンザの影響もあり、センターへの持ち帰りも良しとしたので、誰も来てくれないのではと心配でした。

不安な中の開店でしたが、たくさんの笑顔の入所者の参加に、ほつとしている余裕もない程の大

盛況で大忙しでした。

きりたんぽ汁を盛りつける前に、きりたんぽをさつとつゆにくぐらせてから、お椀に入れるとそれのことなく味が染みて美味しいと教えてもらっていたので、実践しました。何個も注文があり一度に多めのきりたんぽを入れ、少しでも時間を置きすぎると崩れてしまい箸で掴めなくなり、その加減がとても難しい所でした。

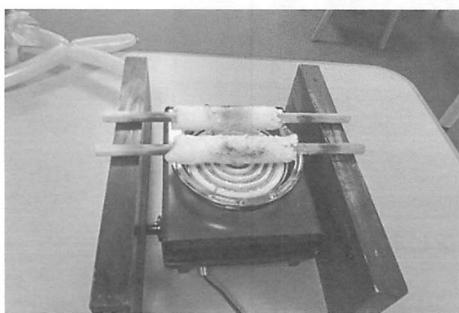


みなさんおいしそうに食べていましたよ

想を聞き、ほつとしました。

会場の一番前のテーブル上に電気コンロできりたんぽを焼いている状態を再現し、皆さんに見てもらいました。興味を持つて見てくれる方もいて、私も気が付けば「これで焼いたんですよ。」と少し得意げに話していました。

いつものようにテーブルを囲んで私達が作った料理を食べながら、ゆっくりとお茶やコーヒーを飲み、入所者同士、入所者と職員が楽しそうに会話をしているのを見にするのが、思い出食堂に携わっていて一番良かったと思う瞬間です。以前は入所者同士自由に往来をして、持ち寄りの料理でお茶飲みをしていたのが、高齢により入所者同士が思うように往き来が



会場で「焼き」を再現してみました

お椀に盛りつけた最後に、セリをパツとはなすと綺麗な彩りになりました。

私は、きりたんぽと鍋に張り付きだつた為、入所者と会話する事は出来なかつたのですが、「おいしかつたよ。」「やはり手作りは違うなあ。」等の感

出来なくなつたり、職員の手を借りなければならぬ、その事で遠慮している方もおられると思ひます。

人間は美味しい物を食べ、笑つて話しをする事が、生きている一番の楽しみだと思つてゐるので、このように集まる場所やきつかけ作りと入所者同士の交流のお手伝いが出来、美味しい物を食べて樂しそうな入所者の表情を見られるのが、思い出食堂チームとしての楽しみです。

社会交流会館も出来、更に交流の機会が増えると思ひます。是非思い出食堂も交流会館の中の一つの活動として貢献していきたいと思う次第です。いつも私達の為に、指導やアドバイス、お手伝いしてくれるマスターはじめ一般寮の入所者の方々に感謝いたします。



秋田・青森名物のコンビネーションです

人事異動

〔退職〕

主任調理師 蛭名信夫
主任調理師 春藤行孝

洗濯長 柿崎昭彦

看護助手 飯田朋子

看護助手 田中節子

看護師 中村栄子

准看護師 坂井いつ子

(以上定年退職)

看護師 佐藤幸子(辞職)

調理師 竹内佳久

看護師 葛西淑子

看護師 相馬幸子

看護助手 中村牧子

看護助手 鶴谷恆人

看護助手 清野千菜

看護助手 大橋愛夢

(以上任期満了)

(以上平成30年3月31日付)

〔採用〕

副園長 横山 �慎(三沢市立三沢病院副園長より)

〔転出〕

総看護師長 天内文子(青森病院看護部長へ出向)

看護師長 木浪真貴子(あきた病院看護師長へ出向)

副看護師長 雪田和子(あきた病院副看護師長へ出向)

看護師 泉谷有美(花巻病院看護師へ出向)

〔転入〕

総看護師長 種市尚子(弘前病院副看護部長より昇任)

看護師長 間山明美(弘前病院副看護師長より昇任)

〔再任用〕

調理師 蛭名信夫

調理師 春藤行孝

洗濯長等職員 柿崎昭彦

准看護師 坂井いつ子

〔昇任〕

医療社会事業専門職 佐藤有範

(医療社会事業専門員より)

(以上平成30年4月1日付)

【採用】

《定員内職員》

看護師 田中千秋（病棟勤務）

介護員 田口陽子（賃金職員より）

介護員 福士芽久実（賃金職員より）

《期間業務職員》

介護員 千葉優子（中央センター1階勤務）

介護員 三津谷菊美（中央センター2階勤務）

（以上平成30年4月1日付）

《期間業務職員》

調理師 佐藤直文（栄養班勤務）

《パート職員》

看護助手 前田由起子（治療棟盲人会勤務）

（以上平成30年5月1日付）

めでいきたいと思つております。

三津谷 菊美（みつや きくみ）
（中央センター2階・看護助手）



佐藤 直文（さとう なおふみ）
（栄養班・調理師）



五月一日から入園者さんの食事のお手伝いをしております。先輩方のご指導を受けながら、何か一つでも残せたらいいなと思い勉強しております。よろしくお願いいたします。

前田 由起子（まえだ ゆきこ）
（盲人会勤務・パート）



二ユーフェイス紹介（平成30年5月現在）

千葉 優子（しば ゆうこ）
（中央センター1階・看護助手）

諸先輩、看護師の方々に補い、支えて頂きながら早く二ヶ月が経ちました。心をモットーに諸先輩方をお手本にしながら入所の方々に頼つていただき、だけるよう努力

日々、入所者の皆様や職員の方々から学ばせて頂いております。至らない点もあると思います。ご指導頂きながら細い目とスキッ歯の笑顔で努めて参ります。どうぞ、よろしくお願い致します。

自治会日誌

二月中

1日 2／1付採用職員1名 挨拶に來訪

山本弁護士、田中志子氏來訪

企画運営會議

入所者説明会 「社会交流会館について、他」

秋田県主催 「平成29年度ハンセン病問題に対する

理解を深めるための講演会」で石川会長が講演

(於：日本赤十字秋田看護大学)

8日

企画運営會議

永続化問題に関する有識者委員会に出席の為 石

川会長出張 (→10日帰園)

行事実行部会

平成29年度院長協議会北海道東北支部総会 (仙

台)

県ハンセン病パネル展 (弘前 ヒロコ3階)

第5回執行委員会

NHK青森放送局 廣澤記者來訪

NHK青森放送局 廣澤記者來訪

厚生労働省施設整備室 営繕専門官來園 (社会交

流会館新築整備工事下検査 (→23日)

第6回執行委員会

23日

三月中

1日 3／1付採用職員2名 挨拶に來訪

岩手県立大学8名來訪、石川会長が講話、入所者

2名より聞き取り

女九十一歳逝去 岩手県出身

社会復帰支援事業担当者会議 (佐藤忠明出席)

松丘保養園の将来構想をすすめる会 第10回総会

平成29年度国費予算説明

一般寮交流会(看護師さんを送る会)

倫理委員会 (石川会長)

第7回執行委員会

真宗大谷派奥羽教区との交流会で石川会長が講話

東谷商店との売店契約

桜の植樹実行部会

さくら保育園卒園式

観桜会実行部会

桜の植樹実行部会

さくら保育園卒園式

第8回執行委員会

3／31付退職、転出職員挨拶に來訪

第8回執行委員会

23日

女八十九歳逝去 福島県出身

札幌弁護士会訪問 (北海道道民会)

毎日新聞 夫記者來訪

特別講演 「ハンセン病の看護」 国立病院機構弘前

病院附属看護学校 講師：総看護師長

24日

特別講演 「ハンセン病の看護」 国立病院機構弘前

病院附属看護学校 講師：総看護師長

25日

特別講演 「ハンセン病の看護」 国立病院機構弘前

病院附属看護学校 講師：総看護師長

26日

特別講演 「ハンセン病の看護」 国立病院機構弘前

病院附属看護学校 講師：総看護師長

27日

特別講演 「ハンセン病の看護」 国立病院機構弘前

病院附属看護学校 講師：総看護師長

28日

特別講演 「ハンセン病の看護」 国立病院機構弘前

病院附属看護学校 講師：総看護師長

29日

特別講演 「ハンセン病の看護」 国立病院機構弘前

病院附属看護学校 講師：総看護師長

30日

特別講演 「ハンセン病の看護」 国立病院機構弘前

病院附属看護学校 講師：総看護師長

31日

特別講演 「ハンセン病の看護」 国立病院機構弘前

病院附属看護学校 講師：総看護師長

30日	離任式
四月中	
1日	4／1付採用・転入職員 挨拶に來訪
4日	第78回定期支部長会議（沖縄）へ出席の為、石川 会長出張（～6日帰園）
5日	行事実行部会
8日	四天王寺大学 田原範子教授來訪（日本文化人類 学会について）
9日	青森県健康福祉部保健衛生課 原田邦弘課長、外 2名 挨拶に來訪
12日	園幹部と執行委員との顔合わせ （公財）人権教育啓発推進センター 野中調査研究 室長、松本研究員來訪（ハンセン病に関する親と 子のシンポジウムについて）
	企画運営會議
	第9回執行委員会
	観桜会実行部会
	女八十七歳逝去 青森県出身
	第10回執行委員会
	青森市福祉部 館山部長、外3名挨拶に來訪
	園内環境整備委員会（佐藤副会長）
	桜の植樹及び遊歩道開通式典・クリーン運動
	第4四半期自治会会計業務監査
23日	
21日	
20日	
19日	
17日	
16日	
13日	
11日	
10日	
9日	
8日	
7日	
6日	
5日	
4日	
3日	

編集後記

前日から降り続いた雨は午前中に上がり、桜花が見頃となつた4月26日午前11時から、社会交流会館のオーブン式典が行われた。三村県知事、小野寺青森市長はじめ関係者、入所者、多くの報道関係者も見られ、関心の高さが窺われた。式典の中で自治会長は、「隔離政策の人権侵害を学んで、世の中の差別問題の解決につなげるために努力しなければならない」と訴えた。

館内には、機関誌など図書コーナー、写真パネルなどが展示されている。その中に、「原子力船むつ」の前で撮った写真がある。免許所持者がバイクで小旅行を楽しんだスナップであるが、一人ひとりの顔からは束の間の自由を満喫している様子が溢れ、ついつい見入ってしまう一枚である。

今後、学芸員配置も予定されているので、展示物の内容もより一層充実して、多くの市民との交流が深まればと期待している。

（佐藤 勝）

23日	女九十一歳逝去 秋田県出身
25日	落語家 桂福丸さん 外1名來訪 社会交流会館オーブン式典

園内の出来事

桜の植樹及び遊歩道開通式典（平成30年4月21日）



川西園長より遊歩道への想いを込めた
ごあいさつ。



新城中学生も力を合わせて！



さくら保育園児もがんばりました！



カラ松の道でクリーン運動

平成30年度観桜懇親会（4月26日）



桜満開の松丘へようこそ！



今年も福丸さんが来て下さいました。

国立療養所松丘保養園要覧

松丘保養園は国立のハンセン病専門の療養所で、創立してから今年で

109年の歴史があり、ハンセン病患者の医療と福祉を事業としております。

所在地

青森市大字石江字平山十九

園長 川西健登

保有敷地 二三七、九六六平方米

(七一、一一〇坪)

建て面積 二三、八一二平方米

(七、二一六坪)

延べ面積 二九、四七三平方米

(八、九三一坪)

□電車の便

1. 東北新幹線・新青森駅下車
(車で約3分)

2. 奥羽本線津軽新城駅下車
(車で約5分)

□バスの便

1. 青森市営バス西部営業所行

2. 弘南バス浪岡・五所川原・黒石
行き 共に松丘保養園前下車

□航空機の便

青森空港より(車で約30分)

□高速自動車道の便

青森ICより(車で約5分)

□なお保養園に隣接して桜の名所三
内園(1km)と国の特別史蹟指

定の三内丸山繩文遺跡や県立美術
館(2km)等があります。

交 通 案 内

発行所

一般財團法人 松丘保養園松桜会

所在地

〒〇三八一〇〇〇三

青森市大字石江字平山十九番地

電話(017)(788)〇一四五・〇一四六

発行人 川西健登

編集人 甲田の裾編集委員会

印刷所

青森市本町二丁目十一一十六

青森オフセット印刷株式会社
電話(017)(775)一四三一番